

<各班の発表テーマと内容>

1班 発表テーマ「空き家取引の促進」

伊藤和暉 乾千紘 岩田幸大 奥平創志朗 佐藤史都 新藤正範 土井駿太郎 辻いぶき
根未茉奈

本報告では、全国の空き家の発生原因とその影響を調査し、空き家問題の解決策を提示した。少子高齢化の進展や人口移動の変化などを背景に、空き家数は増加し続けている。空き家数は1998年から2018年の20年間で約1.9倍になっており、今後も空き家数は増加し続けると予測されている。管理が行き届いていない空き家が、防災、衛生、景観等の面で人々の生活環境に悪影響を及ぼすため社会問題となっている。また、少子高齢化の進展や不動産価格の下落、相続時の相続人多数による権利の複雑化などを背景として、空き家の処分や活用が各地において必要とされている。現状では、自治体や企業などが独自で空き家問題に取り組んでいる事例では不十分である。そこで、過去の研究を参考に空き家数の増減と地価価格に関係性があるのではないかと予想し、調査した結果、関係性が見られることがわかった。そのため、空き家数を減らすことは社会的意義を果たすだけでなく、自治体や住民が所有する不動産の価格の上昇などの大きな恩恵をもたらすことができると考える。本報告では自治体、金融機関、住民を巻き込んだ官民連携を通じた空き家問題の解決案を提示した。

2班 発表テーマ「メタバース×サイバー～web3.0時代における保険～」

天野皓太 岩原珠月 大河真凜 加賀豪 川崎裕暉 坂元里帆 藤原隼汰 松原彩乃

メタバースは2020年から2030年にかけて成熟すると言われている。そして新型コロナウイルスの流行によりオンライン空間による交流が活発となった。大企業や自治体もメタバースに参入し始め、ゲームやショッピングの場に活用されている。また、労働力不足や引きこもりといった社会課題の解決への活用も期待されている。このように将来性があり、今後需要が増加すると予測されているメタバースを研究対象とした。メタバースにはメリットが多数ある反面、内外リスクを抱えている。メタバース内で発生した誹謗中傷といった様々な訴訟も発生していることから、これらを防ぐための実務的対応や利用者に対する啓蒙活動、トラブルが発生した際の事後的対応も急務である。本研究では、これらの新しい課題に対応するために保険会社が提供できる付加価値についてサイバー保険をもとに考察した。

3 班 発表テーマ「脱炭素のための有機農業と保険」

奥村優香 長屋温暉 錦織こころ 福島勇輝 祝部美香 森茜音 山本陽太 吉田桜子

近年、日本における様々な業界において SDGs の取り組みが重要視されている。とくに環境に関する取り組みである「脱炭素」は重要視されており企業によって独自の取り組みが行われている。本報告では、このトレンドに目をつけ、保険を通して環境問題を解決する手法を考えた。そこで着目したのが有機農業である。現在、世界で排出されている温室効果ガスの約 4 分の 1 が農業、またはそのための森林伐採によるものとされており、年々増加傾向となっている。また、慣行農業において使用される農薬が、大気汚染や水質異常を助長させている。これらのことから、化学肥料を使用しない有機農業を、新しい保険によって普及させることにより、この環境破壊を食い止めることができるのではないかと考えた。本報告では、保険に加入する農家、保険を提供する保険会社両方の視点に立ち、以下の 4 つの提案をする。

①有機作物の農地面積による保険料減額

ロダール研究所（米）の研究によると、有機農業は慣行農業に比べ、二酸化炭素排出量が 40% も少ないということが明らかになっている。つまり、有機農業を促進することによって異常気象のリスクを下げることができる。この点に着目し、農地面積の 25% 以上が有機栽培である農家に対して、保険量割引を行い、有機農業の促進を図る。

②収入保険の自己負担部分を補填する保険

現在、日本では農業保険の 1 つとして収入保険がある。しかし、これだけでは全体の 9 割までしか補償されず、残りは自己負担となっている。この点に着目し、民間の保険会社が残りの 1 割を補填する保険を提案する。

③慣行栽培から有機栽培に移行する際の補助

有機農家の方へのインタビューによると、有機栽培に移行する際には土壌を改善する必要があり、その期間は収穫量が減少するリスクがあることを知った。これに対し、金銭面・技術面でサポートをすることにより、有機農業へのハードルを下げることを図る。

④インデックス保険の導入

支払いまでの期間が短くコストを極小化することができるというインデックス保険のメリットに注目し、保険料の安い保険を提供することによって、農家の方々が保険に加入する際の負担軽減を図る。